

第9回報告

たたかいの主役と原動力 総集編その1

6月3日(土)に百里公民館で、9回目の「百里を語る会」が行われ、7人が参加しました。梅雨入り前の爽やかな一日となり、爽快な気分の中で午前中の「語る会」、昼休みを挟んでの「百里平和委員会第28回総会」が行われました。

今まで8回行われてきた「語る会」の1回目のまとめとなる今回のテーマは、「たたかいの主役と原動力」です。講師の伊達郷右衛門氏はその主役を4つ指摘しました。

1 最後までたたかい抜いた百里基地反対同盟の人びと

最後まで戦い抜いた農民は悲惨な戦争体験を持つ人びとでした。家族4人を犠牲にした桜山、満州開拓団の梅澤・宮澤、戦前の百里で苦勞した高塚らの戦争体験は戦後の平和のありがたさ・尊さを憲法9条の一字一句を噛みしめ体に宿していました。地位・名誉・利権・金銭欲などを求めない「素朴な普通の農民だった」ことも大きな力になったと思われます。また陸田化など営農の確立もその信念を支えました。

2 愛町同志会の人びと

山西きよを柱とする小川町住民の基地反対・幡谷リコール・全国初の女性山西町長の誕生の運動は、全国的にも名を馳せました。その後山西は憲法裁判の一方の旗頭になり最後までたたかい抜いた「女傑」として天寿を全うしました。

3 百里弁護団の人びと

憲法9条裁判を基地闘争の舞台で31年も続けてきたことは、百里裁判において他にありません。尾崎弁護団長は戦前、赤い裁判官と異名を取る人、風早弁護士は戦前、治安維持法で2回投獄されるという強者です。戦後の若い裁判官が一目も二目も置く、20数名の弁護団の双璧でした。強力な弁護団ならではの31年のたたかいでした。

4 百里農民を助け支援してきた人びと

「一坪地主運動」や「初午祭り」を担った1965年結成の「百里基地懇談会」は、1978年に統一組織の「百里基地反対連絡協議会」が出来るまで、困難な時期に百里の人びとを励ましました。全国の基地闘争で革新勢力が統一し多彩な活動で現地のたたかいを支援していることは、茨城の誇り・宝物と言っても過言ではありません。